

## Sweet Dreams (Are Made of This)

第5期生 田中 照太

善く遊び、良く学ぶ——入学当初に私が掲げた大学生活への壮大なテーマです。前者のテーマに関して日吉時代にそのほとんどを達成した私は、2年生から3年生に進級するときに、後者のテーマを完全に忘れていたことに気付きました。それゆえ、最近、高拘束高成果ゼミとしての名声を商学部のみならず塾全体に轟かせつつある小野ゼミの門を叩いたのは、タナカ史において必然的な出来事であります。そして今ここに、小野ゼミでの2年、すなわち三田での2年を振り返るための文章を執筆している自分がいることに驚きます。あれれ、もうそんな時期かよというのが正直な想いです。光陰矢のごとしという言葉の意味は経験的に認識しているつもりですが、この2年はまさしく矢のごとく過ぎ去った素敵な時間でした。以降、とりとめのない文章になることは承知で、この2年間を振り返ってみたいと思います。

入ゼミ直後から始まった膨大な課題やグループワーク。小野ゼミの洗礼を受けました。にやにやしなからコトラーを読みふけったり、ちょっとトイレ行ってくるわーみたいな感覚でグル学に向向いたりする私の姿は、日吉時代の私を知る人からすると奇怪なものに映ったようでした。当時の彼女からは共産党にでも入ったのかと批判されました。しかし、人からエグそうだねと嫌味っぽく言われることや同情されること自体が快感、みたいなナルシスト的感情を私は抱いていました。そしてきっと、それは同期全員が共有していた感情であったようにも思います。少なくとも私は、人からそう言われることで、あーおれは今エグイんだ、つまり小野ゼミの一員なんだとアイデンティティを確認し、誇らしく思っていました。そして、春のインプット期間を経て臨んだ電通論文。毎年12月7日になると、高輪郵便局に完成した論文を持って駆け込んだあの日のことを思い出すのかもしれませんが。大学3年目にして初めて、ひとつの大きなものを創り上げることができたという達成感を味わいました。その後の就活、第6期生の入ゼミ、卒論、またはソフトボール大会や各種飲み会など、まだまだ忘れられない思い出はたくさんあります。ちなみに、勉強だけではなく、スポーツや飲みに対して本気なのが小野ゼミの好きなところです。



著者の実家の牛乳とアイドル史晃君

以上、やはりとりとめのない文章になってしまいましたが、とにかく、この2年を通してようやく学ぶというか気付くことのできたありきたりなことが、「目標を持つこと」の重要性です。それは、環境が自分を成長させてくれるという安易な発想を捨て、この活動を通して何を得たいのかとか、どうなりたいのかという野心を持つことの重要性、みたいな感じです。これに気付いただけでも、小野ゼミに入って良かったなと心から思えてきます。そして今、小野ゼミを巣立とうとしている私には確固たる目標があります。強い個が集まった5期生。数年後、彼らとドンペリを片手に近況報告できる日が楽しみでなりません。